主日礼拝説教 「見られている」

日本基督教団石神井教会　2018年9月2日

【使徒書日課】ガラテヤの信徒への手紙　1章1～10節

1人々からでもなく、人を通してでもなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中
から復活させた父である神とによって使徒とされたパウロ、2ならびに、わたしと一緒に
いる兄弟一同から、ガラテヤ地方の諸教会へ。3わたしたちの父である神と、主イエス・
キリストの恵みと平和が、あなたがたにあるように。4キリストは、わたしたちの神であ
り父である方の御心に従い、この悪の世からわたしたちを救い出そうとして、御自身をわ
たしたちの罪のために献げてくださったのです。5わたしたちの神であり父である方に
世々限りなく栄光がありますように、アーメン。

6キリストの恵みへ招いてくださった方から、あなたがたがこんなにも早く離れて、ほ
かの福音に乗り換えようとしていることに、わたしはあきれ果てています。7ほかの福音
といっても、もう一つ別の福音があるわけではなく、ある人々があなたがたを惑わし、キ
リストの福音を覆そうとしているにすぎないのです。8しかし、たとえわたしたち自身で
あれ、天使であれ、わたしたちがあなたがたに告げ知らせたものに反する福音を告げ知ら
せようとするならば、呪われるがよい。9わたしたちが前にも言っておいたように、今ま
た、わたしは繰り返して言います。あなたがたが受けたものに反する福音を告げ知らせる
者がいれば、呪われるがよい。

10こんなことを言って、今わたしは人に取り入ろうとしているのでしょうか。それとも、
神に取り入ろうとしているのでしょうか。あるいは、何とかして人の気に入ろうとあくせ
くしているのでしょうか。もし、今なお人の気に入ろうとしているなら、わたしはキリス
トの僕ではありません。

【福音書日課】マルコによる福音書　12章35～44節

35イエスは神殿の境内で教えていたとき、こう言われた。「どうして律法学者たちは、
『メシアはダビデの子だ』と言うのか。36ダビデ自身が聖霊を受けて言っている。

『主は、わたしの主にお告げになった。
「わたしの右の座に着きなさい。
わたしがあなたの敵をあなたの足もとに屈服させるときまで」と。』

37このようにダビデ自身がメシアを主と呼んでいるのに、どうしてメシアがダビデの子な
のか。」大勢の群衆は、イエスの教えに喜んで耳を傾けた。

38イエスは教えの中でこう言われた。「律法学者に気をつけなさい。彼らは、長い衣を
まとって歩き回ることや、広場で挨拶されること、39会堂では上席、宴会では上座に座る
ことを望み、40また、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。このような
者たちは、人一倍厳しい裁きを受けることになる。」

41イエスは賽銭箱の向かいに座って、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大
勢の金持ちがたくさん入れていた。42ところが、一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅
貨二枚、すなわち一クァドランスを入れた。43イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。
「はっきり言っておく。この貧しいやもめは、賽銭箱に入れている人の中で、だれよりも
たくさん入れた。44皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から自分の持って
いる物をすべて、生活費を全部入れたからである。」

キリストの恵みへと招いてくださった

先週、わたしは、前の週に逝去された一人の教会員S姉妹のご葬儀に参列してきました。以前から、S姉は教会の集まりがあるといつもたくさんのお菓子を作ってきてくださる方だった、と聞いておりましたが、ご葬儀でも同様の生前を偲ぶ逸話が紹介されていました。皆さんの中に、ご葬儀に参列くださった方も少なくないと思いますが、願われながら参列できなかった方もいらっしゃるのではないかと思います。

仏式のご葬儀に参列して、いつも印象に残ることですが、式を司る僧侶が死者に引導を授けるという場面があります。どの宗派でもあるのか、浅学のため知りませんが、僧侶が大きな声を上げて死者を彼岸へと赴かせるのです。素人目には、仏式のご葬儀で一番大切な場面なのではないかと思わされるところです。そして、教会の葬儀を執り行わせていただく者として、その場面は、わたしたちの死に対する理解との違いを感じさせられるところでもあります。

わたしたちの信仰では、たとえ葬儀を執り行っても、死者を葬るということをしても、また、言葉の上で死者を「天に送る」とか「天に召される」と言うとしても、死者を、わたしたちのいるこちらの世界と隔てられたあちらの世界に行かせてしまうわけではないのです。たとえ地上の生涯を終えても、肉体は土の塵に帰っても、なお、わたしたちは、死を超えた命、神の永遠の命のうちに生かされている。死者の存在が地上に生き続ける者よりも神に近いところにあるという意味で「天にいる」と言うとしても、死者が今や天上の礼拝に加わっていると言い表すとしても、その「天」は、この「地上」と隔てられたところではない。「天」は、この「地上」と結びついている。「天」からおいでくださった御子キリストによって、「地上」は「天」と結びついている。そのような信仰に、わたしたちは生きているのです。

キリストが打ち壊してくださった「隔ての壁」は、かくも徹底したものであると、わたしたちは信じています。キリストは、わたしたちの間の「隔ての壁」を取り壊してくださいました。わたしたちの互いの違いによって高く積み上げてきた「隔ての壁」は、キリストが命がけで取り除いてくださったのです。神との間の「隔ての壁」も、敵との間の「隔ての壁」も、そして死者との間の「隔ての壁」も、です。あらゆる「隔ての壁」を取り除いてくださるというお方に招かれ、導かれて、事実「壁」を取り払われたところとして集められてきたのが、ここ「教会」です。ここに集められて来ているわたしたちには、どんな「隔ての壁」もありません。無いはずなのです。ここは、キリストによって集められてきた者の群れだからです。わたしたち自身の努力でも、高尚な精神でも、熱心な祈りでもない。ただ、神がキリストによって、恵みによって、わたしたちの間のあらゆる「隔ての壁」を取り除けてくださったのです。

パウロは、今日の御言葉（ガラテヤ書）で言うのです、「神は、わたしたちを**キリストの恵みへと招いてくださった**」と。「だから、わたしたちは、再び互いの間に『壁』を設けるようなことがあってはならない」、と。

「気をつけなさい」

パウロがガラテヤの教会の人たちに宛てて記したこの手紙は、わたしたちが礼拝で朗読を聞くには少し激しすぎるところがあるようにも思います。「**わたしはあきれ果てている**」とか、「〇〇は**呪われるがよい**」とか、この後にも繰り返し、パウロの感情的とも思える言葉が出てきます。

ずいぶんひどい言葉です。わたしたちは、この手紙が自分たちに宛てられたものではないと思っているので、そういうひどい言葉も聞き流して平気でいるかもしれません。そういう部分は見ないで、パウロの思想や信仰だけを読み取ればよい、と考えるのです。確かにパウロも、この手紙の冒頭で、自分が使徒とされたのは、「**人からでもなく、人を通してでもなく**」と言っています。わたしたちの信仰が人に依存してしまうのは、よろしくないのです。皆さんも、他の人の信仰を願うときに、おっしゃるかもしれません。「わたしではなく、神を見てください」と。この自分を見られたのでは、神との関係を持つ上でつまずきになってしまうから、神を直接見上げてください、と言うのです。それは、そうかもしれません。わたしたちの信仰は、何よりも、神との直接の関係を得させていただくものなのです。けれども、だからと言って、信仰者である自覚があるにもかかわらず、平気で暴言を吐いていてよい、ということにはならないでしょう。

それでも、なお、わたしたちは、信仰のゆえに、激しい言葉を口にしないではいられない思いになることがあるのも事実です。自分の信仰のゆえに、というよりも、大切な人の信仰のゆえに、です。自分の信仰のことならば我慢できるかもしれない。しかし、愛する大切な人が信仰を失う、キリストから離れてしまう、神の恵みを無にしてしまう、ということに対しては、黙っていられない。そういう思いが湧いてこないはずがないのではないでしょうか。

パウロは、ガラテヤの教会の人たちの姿を見て、黙っていられなかったのです。パウロだけではありません。わたしたちは、主イエスの口にされた厳しい言葉を、いくらでも思い起こすことができるのです。

今日の福音書でも、主イエスは、律法学者を目の敵にしたような言葉を重ねられています。このとき、主イエスの前に律法学者がいたわけではありません。しかし、弟子たちや主イエスの教えを聞く人々の周囲には、常に律法学者の存在がありました。主イエスもまた、人々からは律法学者の一人と見られていたことは間違いないのです。

主イエスがここで描かれる律法学者の姿は、多少誇張があるかもしれません。長い衣を着て歩き回る。広場で挨拶されること、良い席に座ることを望み、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。実際、このような振る舞いをする律法学者が、どれだけいたのでしょうか。

もちろん、ここで主イエスは、律法学者を前にして攻撃しているわけではないのです。律法学者をありがたがる弟子たち、人々に向かって、苦言を呈そうとされているのです。「あなたたちは、こういう律法学者をありがたがっているのではないか」と。

だれよりもたくさん

律法学者は、確かに「長い衣」を着ていたと言われます。それが律法学者の目印になっていたという話もあります。けれども、それは、いつも町や村を巡回して教え歩いていた律法学者の「制服」のようなものだったのかもしれません。それを見れば律法学者だと誰もが分かるのです。実際、主イエスは、「長い衣」を着た律法学者が「歩き回っている」と描写しています。ところが、その姿を見て、それだけで律法学者をありがたがるということが、あなたたちの間ではあるのではないか。

あるいは、律法学者が聖書のことを教えるのは、広場であったり、会堂や家であったりしたでしょう。教える人が挨拶を受けたり、一番良い席に案内されるのは、特別なことではありません。ところが、そのように扱われる姿だけを見て、律法学者をありがたがっているところが、あなたたちには、あるのではないか。

あるいは、律法学者は自分の教えることを実践する中で、だれよりも熱心に貧しい者ややもめを慰め、助けるということをしていた者も多かったでしょう。ところが、そういう律法学者の善行を見て、立派だ、すばらしいと、彼を誉めそやすようなことを、あなたたちは、しているのではないか。律法学者が求められてとりなしの祈りを重ねている姿を見て、「さすがに先生だ。わたしたちの祈りとは違う」と、聖人のような扱いをし始めていやしないか。

主イエスが、そのようなことをおっしゃられたのは、もちろん、律法学者たちの中にも自分のことをそのように勘違いする者いたからでしょう。しかし、それだけではなく、主イエスのことを「先生」と呼び「律法学者」の一人とみなしている弟子たちに対して、「あなたたちは、わたしのどこを見ているのか。わたしの立派な姿を見ているのか。わたしが、あなたたちに示そうとしている姿は、そのようなものか」と問いかけられているのではないでしょうか。

だからこそ、主イエスは、続けて、神殿の賽銭箱に献金を入れる人々の姿に目を向けて、弟子たちの注意をうながされたのでしょう。「見よ、やもめが来た。あのやもめを見なさい。貧しいやもめだ。今日の生活費にも困るような者だ。しかし、彼女は、自分の持っている物をすべて、献げてしまった。いや、彼女は、**だれよりもたくさん入れた**のだ。」

主イエスは、このやもめを誉めたのでしょうか。いいえ、彼女は、遠くにいます。彼女は、自分が主イエスの目に留まり、弟子たちとの対話の対象になっていることさえ知りません。しかし、彼女は「**だれよりもたくさん入れた**」のです。そのようにした者として、その姿を主の目にお留めいただいたのです。

本当は、「だれよりもたくさん入れた」のは、主イエスではなかったでしょうか。だれよりも多くご自身を献げ尽くしてくださったのは、主イエスではなかったでしょうか。ただ神の御心を信じて、ただ神のご計画を信じて、すべてお与えくださったのです。その主が、「あの者は、だれよりもたくさん入れた」と言ってくださる生き方を、人は選べるのです。主によって、選べるのです。キリストの恵みへと招かれた者は、すべてを神に明け渡し、献げることができるのです。